

平成17年11月1日発行（毎月1回1日発行）通巻790号
昭和25年4月3日第三種郵便物認可

火星



平成17年11月号

七曜抄 二

山尾玉藻

曼珠沙華 一気に雨となりけり

月白の廁のへちま草履かな

猫がゆき犬ゆき月の祠かな

月の家の裏に流木積みてあり

潦あかりにありし茸番屋
やや寒の朝の日の入る佃煮屋
敗荷の向うゆく声大きかり
初鴨の水の辺に座を正しけり
尼寺のうら真みどりの猪の垣
背に日をあつめて父の冬用意

太白星

柳生千枝子

ひと群の糸のころ草へ夕日の金
芒みな東へなびき故里恋し
父母眠る多摩墓地親し芒原
秋の蝶羨し東へ吹かれゆき
終生の友を喪ひ天澄めり
晩夏佳し教会の鐘鳴りわたり
夢寐に入る時も覚めても露けくて

杉浦典子

かなかなの水に銅鏡沈みをり
羽黒山下りきて雨の星祭

獅子舞の齒のかたかたと野分晴
月山の頂上晴るる芋の露
土ものの上にほほづきのせてあり
霧の山竇錢箱が三つありぬ
霧深き巨きな石を拝みけり

浜口高子

晩夏の宵頬をかすめる蜘蛛の糸
ツレ去りてシテ去り夏の夜の篝
皮椅子をきゆつと立ちたり秋の昼
白桃三つもろうてきたる夜道かな
八月の天地つなぐ滝の音
無花果の下散髪をしてをりぬ
月代や厩の耳の動きぬる

火星作品 山尾玉藻選

梅花藻の流れに冷えし手足かな
宝塚 山本耀子
芸妓名を門に掛けあり百日紅
灼けし石積む音一つづつ違ふ
長短の裾を揃へて芋殻箸
湿原に水門二つ鳥渡る
八幡 飯塚系子
正客は母でありけり青田風
太陽は山にしづめり虫供養
夜の秋の千年杉の祠かな
黄檗の森に消えけりいなつる
鬼灯や軸の佛を掛け流す
干してすぐ乾く手拭秋つばめ
姫路 松たかし
暮れてより潮引きはじむ踊かな
秋の昼水を使へば手の濡れて

草の実を銜へてゐたる蝶つがひ
透けるまで海老干されあり秋彼岸
まつ先に蜘蛛の巣にくる秋の風
畝立の紐引き合へり秋の虹
流灯のうしろに渦の生れたる
白波の高きに碎け魂迎
瓢箪に芯といふものありさうな
みんな去ぬ花おしろいのひらく頃
携帯のぐぐと動きし夜の秋
馬の眼の濡れてゐるなり九月かな
子の涙見てきしあとの真葛原
ハンカチが夫のいちにち知つてをり
空蟬をのせし掌くもりけり
稲の香やさざ波立てる金魚池
草踏んで人待つてゐる良夜かな
威銃平城山すこし退りけり
みそさざい飯食ぶる夫見つつ食ぶ

大和郡山

城

孝子

豊中野澤あき

明石戸栗末廣

選のあとに

山尾 玉藻

梅花藻の流れに冷えし手足かな

山本 耀子

最近、近江の醒ヶ井宿で美しい梅花藻を見たが、掲句の場合もそうした清流での囑目であろう。この「梅花藻」は水面に浮いているのではなく、水中の流れに千切れそうに咲いている花である。「流れに冷えし手足かな」は美しいものを見た心の冷えと言える。同時作の「灼けし石積む音一つづつ違ふ」の「一つづつ違ふ」の「違ふ」に発見があり、秀作である。

太陽は山にしづめり虫供養

飯塚 糸子

「虫供養」は「虫送り」のことであり、徳島県辺りではこう言うらしい。四国に縁の深い糸子さんらしい季語である。「太陽は山にしづめり」と大上段に構えたのは、日没を待っている心の表れである。原句は「太陽を山にしづめり」となっており、「しづめり」を使役として使われたようだが、正しくは完了形であり誤りである。またこう言うスケールの大きな句には使役より完了の方が品格があり、相応しい。

秋の昼水を使へば手の濡れて

松 たかし

「水を使へば手の濡れて」はばかばかしいほど当り前のこ

とである。それを「秋の昼」で一句に仕立て上げたのは、作者の感性に因るものであり、風に乾く手を意識するのは明るい秋の昼なのである。繊細で微妙なところを詠った作品。

瓢箪に芯といふものありさうな

戸栗 末廣

造化の神の成す不思議さを感じ取り詠んだ句である。瓢箪と言うものは育つにつれて一応に間違はなくびれてくるが、その何とも細いくびれに作者は造化の不思議さを感じたのである。「芯といふものありさうな」は、見えないが確かに在るに違いないと言う思いである。

無花果の色疑うてをりにけり

堀 志皋

この句は末廣さんの句とは反対に、造化に対しマイナスイメージを抱いた句。作者はいつもの様に「無花果」を食べていて、ふと不思議な思いを抱いたのである。改めて「無花果」の熟れ色を見ると、むしろ嫌な暗紫色であり、およそ食指の動く色ではないと認めたのだ。これが「色疑うてをりにけり」なのである。

「瓢箪」にしろ「無花果」にしろ、普段何気なく見ているものを改めてじっくり見ることよって、季語の本意を捉えることが出来るのである。(以下略)

恒星圈

戸田 春月

かなかなや古道具店の壺に耳
織田作の路地抜けて出て大西日
夜の秋の上戸は仰ぎ下戸は垂る
盆休み口癖となるどつこいしよ
指組んで胸に手を置く天の川

土屋 酔月

長屋 璃子

新聞のあつき折込み朝ぐもり
道心のなほ定まらず朴散華
いつか読むために買ふ本小鳥来る
朴の花天辺に風呼びにけり
露けしや草も畑も石ころも

空蟬のささつて居りし薔薇のとげ
鶏頭を眺めて笑まぬ眼のありし
お台場に小香港ある秋暑かな
球体の欠けそめしより月親し
完熟の梨は螺旋に剥くべかり

戸栗 末廣

野澤 あき

盆花に猫のつむりの触れゆけり
山頂に霧濡れの声流れけり
岸を打つ二百十日の貸ポート
秋立つと夜目にも白き波頭
糸とんぼ釣竿の先さびしくす

セミナーの椅子かたづけし敗戦日
地球儀の赤き日本や原爆忌
なんとなく秋に入りたる家路かな
かなかなかなさやかなれども風の音
忌日くる枝の先まで青棗

獅子座

山尾玉藻推薦

山田美恵子

水引草二家の墓守りゐたる
桃の浮く桶に雨粒嵯峨野茶屋
落柿舎のとなり鳴子の布赤し
満員のミステリーバス黍嵐

中上照代

ごめんなさい何も出来ずに魂祭
盆過ぎの眼鏡のねぢを締め直す
流星や弟妹三人病得て
体調を問ひつ問はれつ夜の秋

南浦輝子

片蔭の方に水音してゐたり
扇風機大きく回しひとりなり
しばらくは扇子の風を喫茶店
サツカーの果てて気づきし蟬時雨

中西みどり

島に入り鹿の子の固き鼻に会ふ
涼しさや千畳閣に笛一管
夏の潮大鳥居まで歩きゆく
引き潮の蟹をあそばす能舞台

高松由利子

いなつるび鯨の町の浮きあがる
かなかなや宇陀に大きな晒桶
念仏を河口にとどめ施餓鬼幡
陵を遠拝みせしねこじやらし

波田美智子

蟬声のふと途切れたる溽暑かな
娘の家に曾孫と猫と昼寝かな
刈り草の匂ひの中を蝶飛びり
冬瓜汁腸の薬と出されけり

丸山照子

足もとに馬券ちらばる大火花
鶏頭のこぼれ咲きなる盆の道
夕ちかく晴れしみちのく麦とろろ
鍵善に雨を見てゐる迎鐘